

自律性に着目した若者の防災意識に関する研究

1250438 久保川紀香

指導教員 土屋 哲

研究背景

近年、若者の防災意識の低さが明らかになっている。この理由として、種々のバイアスなどの心理的要因や、居住形態などの環境要因が指摘されている。大学生を対象とした先行研究では、心理的側面および環境的側面の双方から防災意識との関連が分析された。しかし、ここでは「心理的要因が形成される環境」のような、心理的側面と環境的側面との関連が扱われていない。

研究目的

本研究では、先行研究における環境的側面の分析から見出された「居住形態と若者の防災意識との関連性」を、心理的側面と結び付けてより具体化し、「居住形態よりも自律性こそが若者の防災意識に直接的に影響を与えている」との仮説を立て、これを検証する。

研究方法

高知工科大学の学生を対象にアンケート調査を実施し、防災意識や自律性に関する質問項目への回答をもとに個人の心理尺度を数値化した。さらに、各個人の平均値を算出し、①居住形態と防災意識、②自律性と防災意識、③居住形態と自律性の関係に統計的に有意な差が見られるかを検証した。

分析結果

検定の結果、自律性と防災意識の関係においては統計的に有意な差があると判断された。一方で、居住形態と防災意識、居住形態と自律性の関係には有意な差は見られなかった。また、居住形態と防災意識の関係では、先行研究とは異なる結果となり、防災意識の高さに影響を与える要因が、単純に居住形態だけでは説明できない可能性が示唆された。

考察・結論

居住形態と防災意識の関係から、防災意識の高さを決定する要因には居住形態以外の要素が影響している可能性が示唆された。また、自律性と防災意識の関係においては、自律性の高さが防災意識の形成に影響を与える可能性が示唆された。したがって、先行研究では居住形態が防災意識を高める重要な要因とされていたが、本研究では居住形態よりも自律性がより大きな要因であることが示された。今後は、自律性を高める方法についてさらに検討する必要がある。